

お薬のしおり

抗生物質について

No.43 (H17.4)

東京医科大学病院 薬剤部

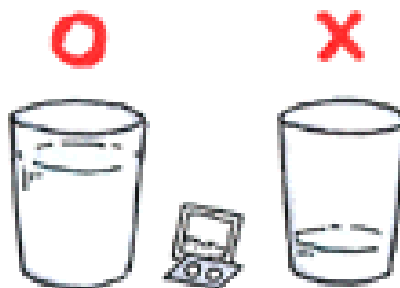
皆さんは「抗生物質とは何か？」と質問されたらどう答えますか？抗生物質とは、「微生物によって産生される化学物質で、他の微生物の発育を阻止または死滅させる物質」です。“元祖抗生物質”といわれるペニシリンがフレミングというイギリス人によって発見されたのは1929年のことです。「アオカビがペニシリンを生み出し、そのまわりに一緒にいたほかの微生物の発育を抑えている」という不思議な現象を観察したのが始まりです。

現在までに発見された抗生物質の数は4千を超え、3万以上の誘導体がつくられ、50以上のものが臨床的に使用されています。その種類もたくさんあり、ペニシリン系、セフェム系、マクロライド系・・・などなどどこかで耳にしたことがあるかと思います。いろいろな方法で微生物を死滅させるわけですが、その方法の違いによって、～系といくつかに分けられているのです。

それぞれ抗生物質には有効な菌種の範囲があり（抗菌スペクトル）、やっつける菌が決まっていますので、原因となる菌がはっきりわかっている場合には、その菌をやっつける抗生物質を使えばいいということになります。

抗生物質の服用上の注意点としては、医師の指示通りの服用期間を守ることが大切です。服用後、短期間で症状が軽減したからといって、服用を中止すると再発する場合がありますので自己判断で中止することは止めましょう。

また、少なくともコップ 1/2 杯以上の水または微温湯で服用してくださ



い。ミルクなどで服用すると吸収が低下する場合がありますし、少量の水での服用は、食道などに止まって炎症を起こすことがあります。「抗生物質が耐性を持つ」という言葉を聞いたことがありますか？これは漫然と長い期間、抗生物質を使い続けることにより、以前はその抗生物質が効いていた細菌が変化して、徐々に効かなくなってくることです。耐性菌として有名な「MRSA（メチシリン耐性黄色ブドウ球菌）」とは、以前ほとんどの抗生物質が有効だった黄色ブドウ球菌が「耐性」を持ち、今ではほとんどの抗生物質が効かなくなったものをいいます。

抗生物質の主な副作用には、いわゆるペニシリンショックに代表されるようなアレルギー反応があります。軽いものでは、かゆみのある発疹や軽い喘鳴、重いものにはアナフィラキシーと呼ばれる命にかかわるものがあり、これはのどの腫れ、呼吸困難、血圧低下などを起こします。

下痢、胃のむかつきなどの消化器系の副作用もあります。さらに場合によっては、腎臓、肝臓、骨髄などの器官の機能を障害するような重い副作用を起こすこともあります。副作用の報告件数で常に上位を占める抗生物質ですが、医師の指示通り服用することにより、大きな効果を生み出してくれることも確かです。

もし、薬を飲みはじめて「なにか普段と違う、変だな」と感じたら、すぐに受診するか医師、薬剤師と連絡をとるようにしてください。副作用をこわがりすぎてもいけません。自分の薬の副作用やその対処法を知ることが、とても大切なことです。できることなら、具体的にどんな症状に注意し、どう対処したらよいのかをあらかじめ聞いておくといいでしょう。

